

の通過を許さなかった。

19世紀半ばオーストリア・ハンガリー二重帝国を形成し、過去ベーメン（チェコ、スロヴァキア）、ハンガリーを支配下におく多民族国家であり、東方のスラヴ民族と西方のゲルマン民族の狭間にある中欧の国家として長い歴史を辿っている。オーストリアは国家としての、またオーストリア人としてのアイデンティティ（存在証明）を常に問いかけているようであり、中立国家として存在することにそれを求めているのではない。それが歴史からオーストリアが得た叢知でもあろう。私が滞在していた95年8月ボスニア・ヘルツェゴヴィナの紛争が燃え盛っていた。8月4日クロアチアが突如クラジナの奪還をはかってセルビア勢力に攻撃をしかけ、全面的戦争の危機に陥った。翌日、ウィーンの大衆紙Kurierに次のような言葉が見えた。「たとえ、歴史は単純に繰り返さないとしても、我々は常にバルカンがかって一度全世界を火の中に投げ込んだことを忘れるべきではない。」

1914年サラエボで、皇太子夫妻がセルヴィア人青年に暗殺され、第一次世界大戦の引きがねになったのであり、バルカンの火種の怖ろしさはオーストリア人には身に沁みている筈である。

（1999年3月28日、記）



英国の食べ物 —私の体験から—

法學部
三好 正弘

英国に15年も住んでいた日本人記者によれば、英国のレストランの料理が最近格段においしくなったという（黒岩徹「プレミアのイギリスはおいしいぞ」『諸君！』1999年2月号）。英国人は自分達の食べ物を世界でも不味いものの代表と自認してきたフシがあり、私も初めての梅外滞在経験をした1970年夏に、同じ程度の中華料理をハーグ、パリ、ロンドンと食べ比べてみて、ロンドンのが一番不味かったという印象がある。

しかし、住めば都で、その3年後にロンドンの南郊に2年間住んだときは、食べ物の不味さは気にならないで過ごした。月曜から金曜までの昼食は大学の食堂で普通の英国料理を食べていた。我が家の子供達も近所の小学校で給食を食べ、今日はデザートが だったよ、などといって大いに楽しんだようだった（このために毎週月曜日に1週間分のディナー・マネーを学校に持参した）。魚好きの私は、大学食堂でも鯧のムニエールが出る木曜日（これはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）と、直径6-7センチで厚さ1センチほどの円盤の鱈子（缶詰か）の醤油煮ともいべき料理が出る金曜日（これは私の所属したキングズ・コレッジの食堂が金曜日に肉を避けたため）がとくに楽しみだった。瀬戸内生まれの私には、鯧の美味さは生まれて初めての発見であったかもしれない。これに味をしめて近くの朝市で生の鯧を見つけ、自宅で塩焼きを作ったこともある。ほかに、鱈が主な材料だが、フィッシュ・アンド・チップスがある。これは、あるいは上流階級の人達にほ敬遠されるものかもしれないが、私

は美味しいと思う。我が家のあった村に一軒のフィッシュ・アンド・チップスの店があり、何度かの週末に、歩いて5,6分その店に出向き、待っている間に揚げてくれる鱈又はプレイス (plaice = オレンジの斑点のあるカレイかヒラメ) とチップス (ジャガイモのぶつ切り一皮をむかず、ときに土がこびり付いている一から揚げ) を急いで持ち帰り、夕食として楽しんだ。

フィッシュ・アンド・チップスには今でも愛着があり、英国を訪ねるたびに必ず食べている。愛知大学がロンドン西方のレディング大学に送る英語研修生にこれまで3回付き添ったが、3回ともレディング滞在中は毎日パブでビールを楽しみ、往々にしてそのままパブでフィッシュ・アンド・チップスを夕食とすることになった。よく飽きないもんだね、といわれるが、私は全く飽きることがない。

四半世紀前の滞英中、ピカデリーのフォートナム・アンド・メースンという高給食料品店の最上階のレストランで知人夫妻に素晴らしいフランス料理をご馳走になったし、後年チェルシーの小さなレストランでキングズ・コレッジ時代の恩師からこれも素晴らしいキドニー料理をご馳走になったり、また別の年に同じ地区の彼のクラブで美味しいフランス料理をご馳走になったこともある。ほかに、同僚のM氏のご母堂がご健在のときにその地元チジックのテムズ河畔のレストランでムール貝の料理をご馳走になったり、私の開拓したピカデリー・サーカス裏のシーフード・レストランでドーバー・ソールのバター焼きに舌鼓を打ったという経験もある。どれも印象深い経験だが、これらはいわばよそ行きの料理だ。回数が少ないから覚えているのかもしれない。

料理の美味さでは、1973年秋、家族が合流するまでの2か月世話になったロンドン北部の下宿のおばあちゃんの手料理を忘れる訳にはいかない。女学生時代にベルギーに留学していたといい、その時に味にうるさいベルギー風を身に付けたい。ブリティッシュ・カウンシルの紹介でそのおばあちゃんの所に下宿し、最初の約束では賄いは

朝食だけになっていたところを、頼み込んで夕食も作ってもらうことにした。この夕食が素晴らしかった。朝食も美味しく、私の好みは、ベーコン・マッシュルームだった。亡くなったハズバンドもこれが大好きでしてね、殿方は皆さんこれが好きなんでしょうかね、というのが口癖だった。アガサ・クリスチーに似た上品な老婦人で、日本人びいきだった。

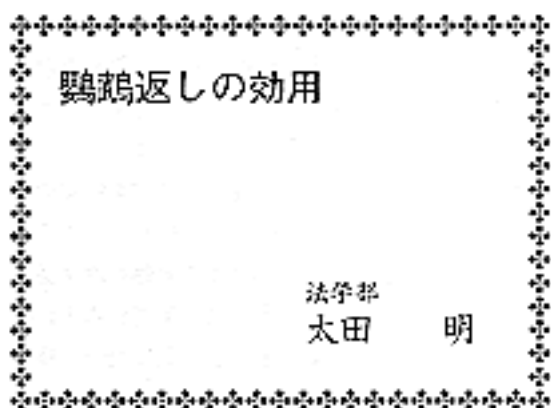
こういう具合に、確かに美味しいものはあるのだが、ひとつは英国人のユーモアか、自らの料理を不味いものと笑い飛ばす風があるのも確かだ。ここにとっておきのエピソードがある。1975年7月中旬か下旬のこと、タイムズ紙で読んだ話である (当時の新聞切抜を紛失し、記憶に頼っている)。当時首相の地位にあったハロルド・ウィルソン氏がたしかパリから帰国し、下院議会で帰国報告をしたのが、詳細に報道されていた。ウィルソン首相は、報告の冒頭で、パリ滞在中に腹をこわしたが、これは多分フランス料理が美味すぎて食中りをしたのであろう、と議場を笑わせ、ついで、帰宅して英国の質素な (plain) 食事に戻ったら、たちまち腹の具合がよくなったと満場を沸かせたのである。

その時私は不覚にもウィルソン首相の渡仏の用件に十分注意を払っていなかったが、帰国した後、1977年6月30日付けの英仏大陸棚境界画定仲裁判決をその翌年に読んで、ちょうどウィルソン首相がパリ訪問中の1975年7月10日に英仏間の大陸棚の境界画定を仲裁裁判に付託する協定が署名されていたことを知り、当時の不明を恥じたのである。後年世界中の大陸棚の境界画定判例を研究することになるこの私が、こともあろうに、当時ウィルソン首相がおそらくその英仏仲裁付託協定の交渉のために渡仏していたことを見逃していたのだ。ウィルソン氏のユーモアにごまかされて、彼の冒頭の冗談の後の重要な報告を私が見落とし、それとも、このような重要な事案はわざと報告から省いてあったのか (この仲裁裁判は両国にとって機微な案件で、判決文の公表も意図的に1か月ほど遅らされたし、判決文以外の裁判関

係の文書は一切公開しないことが約束されている。拙稿「英仏海峡大陸棚境界画定仲裁裁判について」『愛知大学・法経論集・法律篇』87号参照)、ともかく彼のユーモアに感嘆した記憶がある。

当時ロンドン近郊に住む口さがない日本人連の間では、英国人の家庭に食事に招かれたら、一通り腹ごしらえして行った方がよい、といわれていた。日本人家庭では人を食事に呼ぶときは、遇刺ともいえるほどに料理を用意するが、私の経験では、英国人の家庭に招かれたときは、まず、長々とドリンクの時間があり、そこでの話題は森羅万象にわたる。この間は僅かなつまみしか出ない。いいかげんお腹が空いたとおぼしき頃になってやっと、食卓のある別室に案内される。さて食事だ、と身構えると、出されてくるのはあまり大きくない肉の塊の焼いたものと少しばかりの温野菜でおしまい。その後はデザートで、これには招待した側が意匠を凝らす。

要するに、人を食事に呼んだときは、長々とドリンクを楽しみ、料理はあまり要らないという印象だ。その代わりに、酒はふんだんに用意しておく必要がある(私の住んだ家は家具付きだったが、グラスの種類の多さに驚いた)。彼らは、私の印象では、招かれたときには、とことん飲む。そして、夜半前に暇乞いをするのは失礼だと心得ているフシがある。これは一つの食文化であって、私の郷里などで、客が食べきれないほどに食べ物でもてなし、話の内容よりは客がそこに居ることを重んずるといった風の接待とはまるで違う文化だ。食べ物はサシミのつま、メインは話で、その会話の中心は招待した側の主婦が務める。それを盛り上げるのは酒というわけである。だから、酒に飲まれて話ができないようでは信頼を失う。そういう文化のようだ。そのために、食べ物には我々日本人ほどこだわらないということなのかどうか。今後の研究課題だ。



外国語の運用に関して日本人は読んで理解したり、読んで翻訳したりすることは得意だが、聞いて話すというコミュニケーション的運用の面では劣るというのが一般的な評価である。それはいったいなぜなのか。この点に関連して、今回の海外研修中に経験したことを少し記してみたい。

私自身は外国語の学習者という観点からは、すでに古い世代に属する。つまり、会話を中心にしたコミュニケーション的運用能力ではなく、文字で書かれたものを読んで理解することを中心にしたドイツ語教育を受けた経験しかない。

すでに20年以上前になるが、私の私の大学の教養課程では、第二外国語としてのドイツ語の授業は文法と講読の二本立てであった。文法は週に2コマ、そのなかで例の定冠詞の変化から始まり、接続法を除く基本的な部分に関しては1年前期でほぼ終了した。講読も週に2コマだったが、違う担当者が別の読本を教科書としていた。私は理科系の学生であったが、この点では理科文科を問わなかった。いまからみれば、いや当時でもかなりハードなスケジュールである。学術の言葉としてのドイツ語の地位は、私が専攻しようと思っていた分野ですでにかなり低下しており、英語で十分であったから、本腰を入れてドイツ語を学ぼうという動機は弱かった。もっとも、マーラーの歌曲をドイツ語で理解し歌いたいという実に殊勝な同級生もいたのだが。私の方は、大学の入学関連書類に第二外国語選択の欄があったので、「まあ外国語はドイツ語だな」という父の友人の言葉のままにドイツ語を選択したに過ぎない。(その父